

帝木蓬生氏講演会

自分の都合のよいうに、
粉飾したり改変を加えた歴史からは、
東の間のつじつま合わせしか生まれて来ない。
たとえそれがいかに心地よいものであっても、
長続きはせず、いつかしっぺ返しが訪れるのだ。
私は日本にそういう道を歩んでもらいたくはない。

- 『三たびの海峡』新潮社、1992年、より

自著『三たびの海峡』を語る

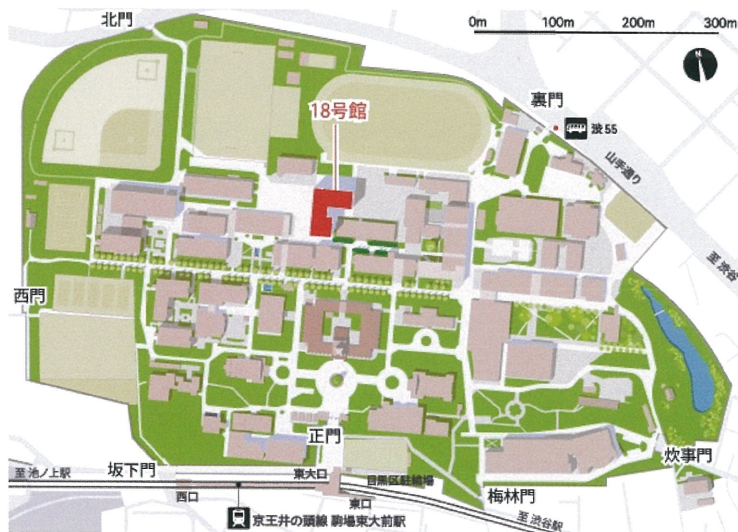
2018年2月10日 (土) 14時 - 16時30分
会場：東京大学駒場 I キャンパス 18号館ホール

事前登録不要
無料

言語：日本語（通訳なし）

交通アクセス

京王井の頭線「駒場東大前駅」下車



主催：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構・韓国学研究中心

共催：東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻

後援：東北亜歴史財団

① 帯 木 蓬 生 氏 プ ロ フ ィ ー ル

1947年、福岡県生まれ。

東京大学仏文科卒業、テレビ局に就職するが、退社して九州大学医学部で学び、精神科医となる。精神科医としての仕事とともに小説を執筆し、1992年には『三たびの海峡』が吉川英治文学新人賞を受賞。その後も、『閉鎖病棟』（山本周五郎賞）、『蠅の帝国—軍医たちの黙示録—』『螢の航跡—軍医たちの黙示録—』（日本医療小説大賞）や朝鮮・韓国を舞台とする『受命』、『受難』などの作品を送り出し、多くの読者を獲得している。また、小説のほか、精神医療、ギャンブル依存の問題を論じた著作も発表している。



② 開 催 に 寄 せ て



帯木蓬生著『三たびの海峡』は、戦時下、九州の炭鉱に強制連行された朝鮮人・河時根を主人公にした作品。1995年にはこれを原作とする映画も作られました。炭鉱から逃亡し朝鮮人集住地で暮らすようになった河と日本人女性との恋愛、その後の別離という戦時・戦後直後の回想を織り込みながら、韓国で暮らしていた河が、数十年ぶりに訪れた日本の連行先の地で進む物語です。

作品から読み取れる、日本の加害の歴史に向き合い、韓国・朝鮮の人びととの友好を築こうというメッセージは、今日の日本でますます重要になっていると思われます。また、炭鉱労働の過酷な実態や、朝鮮人集住地、そこでの暮らしの描写は、その時代の実状をリアルに伝える描写を含むもので、過去の記憶の記録、継承に携わる者にとって、大いに参考になるものです。

このたび、著者である帯木蓬生氏を東京大学駒場キャンパスにお招きし、ご自身にこの作品の執筆についてご講演をいただきます。多くの学生、教職員、一般市民のご参加を呼びかけます。